

◆ かつば民話シリーズ⑫ ◆

河童村三流のお土産

かつばむら さんりゅう の おみやげ



作:近藤せいけん



相模の国の河童村「三流」人間界からは見えない幻のかっぱ村。そこへ出入りが許された、うし松、うま松兄弟、河童族と人間族との交易が始まった。

うし松、うま松兄弟がお日様が上ると同時にかっぱ村「三流」に向かう。

大きな荷車を引きながら、じゃり道をいきおいよく進む。人間界と河童界分ける境界に来て、かっぱ界に入る「三流」の入り口で通行手形の真珠の腕輪をかざす。すると見た事ないかっぱ界の三流村の風景が目に入ってくる。

うま松「何と～こんなところにかっぱの国があるとは。何と～広い、田園風景だこと・・・、何と～おおぜいの河童がいること・・・」

うし松「さあ～太郎村長の所へいこう」

太郎村長の家の前にはすでに、村長がでできて、二人を出迎えに立っていた。

うま松、うし松が深ぶかと頭を下げる。

「よう、きた、よう、きた、待っていたぞ」

「先日は弟が危ないところを助けてもらい、ありがとうございます」

「また、沢山のいただき物をし、本当にありがとうございます」

「おかあ、からも、くれぐれ宜しくとのこと」

「そうか、そうか、うし松、どうじゃ、もう身体はよいか」

「へい、もうすっかり、よくなった」

「それは、よかった。」

荷台の上から、砂糖の袋を下ろす。

「さあ～村長様、少ないが、砂糖です」

「受け取ってください」

「これは、貴重な物を、かっぱ族にとっては大変貴重な物じゃ。ありがたくもらいますぞ」

「ところで、うま松うし松、商いをする場所じゃが～」

「いい場所があるか？」

「へい、厚木宿の、人どうりの多い場所の、地べたに並べて売ろうとおもいます」

「そうか、路上ですか・・・」

「雨の日は困るのではないか？」

「屋根のない所では、品物が傷むのじゃないか？」

太郎村長は、川漁の担当い吉を呼び、いつけた。

「川の中の保管庫から、真珠球を桶にいれもって来てくれ。それに、かっぱ村の名医 赤ひげを呼んできてくれ」

「お安い、ご用！がってんだ」

やがて名医の赤ひげがやって来た。

「村長、お呼びですか」

「赤ひげ先生、うま松、うし松のかか様が、心の臓の病で床について、いるそうじゃ。先生、河童族の特効薬をせんじてやってください」

「ところで、うま松、うし松、かか殿の病だが、どんな具合じゃ？詳しく、聞かせてくれ」

赤ひげ名医がうま松、うし松の話聞いて、診断をした。

「ほう、そうか、解った、まかせくれ」

赤ひげ先生は特効薬づくりのため、診療所へ戻った。

入れ替わりに、い吉が桶一ぱいの真珠球を持ってきた。

「村長、真珠球を持ってきた、どうするのか？」

太郎村長が真珠を入れた桶を受け取った。

「うま松、うし松これをおぬし達にあげる。この真珠球を売って、お金にして、お店を買え。路上の商いでは、いろいろ面倒がおきる」

二人の兄弟は顔を見合わせ、驚いて、村長を見つめた。

「本当にこんなに沢山の真珠球をいただいていいのか」

「びっくりだ！」

「よい、よい、末長く、おぬし達とかがっば村「三流」との交易のためじゃ。えんりよ、するな、取っておけ」

「何と、店が持てるのか、夢を見ているようじゃ」

そこへ、名医の赤ひげが特効薬を持って現れた。

「この特効薬は心の臓にきく、かっば界の薬じゃ、持って行って、かか様に飲ませろ」

「すぐに、きくはずじゃ」

「ええ～、なにからなにまで、ありがたや、ありがたや」

うま松、うし松は手を取り合い、涙を流し喜んだ。

沢山の野菜、漬物、川魚、海魚、を荷台に積んで、かっば界を後にした。

(終わり)